

画面録画を用いての書き手の内省分析： 英語母語話者がメールを書くときに何を気にしているかを探る

Analysis of Writers' Introspection with Screen Recorder: What Factors Do English Speakers Care about When They Write Emails?

川崎 晶子
KAWASAKI Akiko



内省分析、顧慮、メール作文、画面録画、フォローアップ・インタビュー
Introspection analysis, linguistic consideration, writing e-mails, Screen Recorder, Follow-up Interview

Abstract

This research note introduces and examines a research method for eliciting writers' introspection in writing emails. The method is a combination of Think Aloud Protocol and Follow-up Interview with QuickTime Player Screen Recorder.

Two English native speakers joined the pilot study, in which they wrote three types of emails: refusal emails in a work situation, thank you emails for hospitality, and a condolence email to a person who lost his/her son. All of the situations were familiar to the informants, and they had clear images of to whom and about what they wrote. The process of writing emails was recorded in QuickTime Player Screen Recorder, so all of the letters' keyboard input, pausing and editing were video recorded. A second conversational session for reviewing what they wrote (a kind of follow-up interview by the researcher) was also recorded with QuickTime Player.

There are various matters to be attended to when conducting this introspection analysis, but the result of this pilot study shows that this method has good potential as a way to describe the writer's introspection in the analysis of "linguistic consideration."

1. 背景、目的

人は、話す時も書く時も、様々なことを気遣い考慮して言葉を発する。

南は著書『敬語』（1987）において「顧慮」という言葉を用い、日本語の運用の際の様々な気遣いとその際の評価的態度や表現の使い分けを論じている。顧慮は、「何かを気にする、何かについて気を配る」ことで、例えば文末の「です・ます」の使用は、送り手（話し手・書き手）の受け手（聞き手・読み手）に対する顧慮の発現例である。この顧慮は常に送り手のなんらかの評価的態度を伴っており、上記の例であれば、話し手は「聞き手は目上である」という評価的態度を持っていると考えられる。この顧慮や評価的態度に基づいて、なんらかの対象についての扱い方の違いがあり、その扱い方の違いを反映した表現の使い分け、上記の例では「です・ます」の使用、がおこなわれる。南の著書の題名は『敬語』であるが、南の扱う顧慮の視点からの敬語の範囲は非常に広く、尊敬語などの敬語専用言語要素から、語彙選択、文の長さ、終助詞、等の様々な一般言語要素、そして、表情や笑い、字体、服装などの非言語表現までも含まれる。また尊敬、謙譲、丁寧などのいわゆるプラス敬語から、軽卑、尊大などのマイナス敬語も含め、ことばを使うときに関係するさまざまな気遣いとそれを反映した表現の実現方法を包括的にとらえた理論となっている。

この顧慮は、送り手が大事と思っていることが反映される。上下関係の礼節が大事と思っていれば、それを気にし、それが示せる表現を選ぶ。親しさが大切と思っていれば、それが現れる表現を選ぶ。送り手がどのような顧慮を感じているかが明確になれば、その人の世界観も明らかになる。また、顧慮の内容と発現された表現から、送り手が母語とする言語での顧慮と表現の関係も明らかになる。

この顧慮の存在は、自らの言語行動をモニターしてみると、日常様々な場面で実感することができる。特にそれを感じるのは、手紙やメールなどを書いている時である。時間の流れとともに一瞬で進んでいく話し言葉とは異なり、書く物は見直したり、後戻りして直したりすることができるため、時間をかけてより適切な表現を求める作業をする。話し言葉ではパターン化して無意識におこなっていることでも、書き言葉では顧慮が意識にのぼることも多い。表現を探しているうちに、こういう誤解は避けたいから、もっとわかりやすくしたいから、等の、気にしていることや気遣いがより明らかになることもある。

本研究では、書き言葉、それも画面で記録が残るパソコンでのEメールの作文のプロセスを記録し分析することにより、書き手が何を気にし、気遣って作文をするかに焦点を当てることにした。日本語は気遣いに関しての言及が日常的になされることが多く、その言い方もパターン化しているため、原則があまり見えていないアメリカ英語のメール作成を対象とし、アメリカ人が何を気にしてメールを書いているかをさぐる。

そもそも、顧慮はどのような方法で記述することができるのであろうか。表現の選択は発せられたものを記録すればよいが、顧慮は送り手の心の内の出来事であり、外からみて簡単にわかるも

のではなく、また記録は一切のこらない。どこまで意識的におこなわれていることなのかも不明である。それをどうにかして意識化し、本人に語らせ、記録にとり、分析するか、を考えた。メールの作文はパソコン上でおこなわれるので、画面録画の機能を使って記録をとることにした。Mac 内蔵のアプリケーションの QuickTime Player の Screen Recorder (画像録画。以降、SR と呼ぶ。) という機能を利用することにし、パイロット調査として、アメリカ英語の母語話者の女性 2 人を調査対象者とし、作文のプロセスを画面録画し、それを見ながら内省を言語化してもらい、分析を試みた。

どのような内容のメールを書いてもらうか、どうやって画面収録をするか、等、研究をすすめるにつれ安易な計画ではデータの精度が落ちることを実感し、未だ方法論検討の試行錯誤中の状態である。

本稿では、パイロット調査として、メールを書くときのプロセスを録画、それを見ながらのフォローアップ・インタビューで内省の言語化の様子を録画・録音し、それを文字化し、分析し、英語母語話者がメールを書くときに何を気にしているかを探りながら、内省を導き出し記述する方法を検討することを目的とする。

2. 方法

内省的データ収集法の方法の代表的なものに、Think Aloud Protocol (TAP、発話思考法) とフォローアップ・インタビューがある。その利点および注意点を踏まえ、パイロット調査の内省の言語化の方法を検討した。

2. 1. TAP とフォローアップ・インタビュー

TAP を用いた研究は、1980 年代後半から始まり、翻訳をする際のプロセスの研究などに使われた。文字通り考えていることを口に出しながら翻訳作業をおこなうのをテープレコーダーで録音し、分析する方法である。考えていることを口に出す事が簡単にできる人、難しさを感じる人と個人差が大きい事が欠点としてあげられている。(Brown 2006, pp. 678-686)

言語教育の分野でも、特に読み書きの研究で TAP が用いられることがある。Jourdenais、他 (1995) は、第二言語としてスペイン語を学んでいる英語話者の学習効果を、TAP 作文で証明した。1つのグループには、指導したいターゲットの文法事項を太字で強調したリーディング教材、もう一方には何も強調がないリーディング教材をまず読ませ、その後、同じような内容の絵を見せ TAP しながら作文をさせた。前者のグループの方が、TAP で文法事項に言及することが多く、また、作文そのものにもより多くのターゲットの文法事項が含まれており、文法事項の強調は効果があったことが証明された。TAP は、第一言語習得と第二言語習得の作文プロセスの違いも明らかにすることができるなど、様々な分野で使われている。しかし、ここでも TAP の問題点として上手下手の個人差が大きく、初心者と経験者との差の大きさなどが問題視されている。

本研究でTAPを実施するのが良いのか避けるべきか、未だに結論が出ていない。パイロット調査で、調査対象者には何の指示もせずに音声録音してみた回があり、つぶやきが入ることがあった。それは自然な状況での内省の発露であるが、そのような発語は非常にまれで、ほとんど情報はとれない。やはり、書きながら考えていることを口にだすように指示をする必要がある。本人が抵抗なくやれるのなら、指示して録音するのも良いのかもしれない。しかし、一長一短である。その場での説明であるので、あとで考えるよりより正しい内省ができていないはずである。一方、書き手の考えていることを書きながら口にだすという行為は、日頃おこなってはならず、不自然な状況となる。無意識に書いたり書き換えたりしていることをあえて説明しようとするようになる場合もある。書く作業が中断され、あるいは説明しやすい書き換えに誘導する可能性もあり、普段おこなっているメール作文とは質の異なる作文プロセスになる可能性もある。自分でもやってみてやりづらさを感じたため、パイロット調査では、TAPは取り入れずにやることにした。

フォローアップ・インタビューは1970年代から、オーストラリア、モナシュ大学でNeustupnýが中心となっておこなっていた言語管理研究で使われた手法で、調査対象者の言語行動に関する内省を言語化する方法として開発されたものである。現在も、会話のビデオをとるなどの言語調査の後に調査対象者本人がどういう意識であったか、その時の気持ちや、その言語行動をとった理由などを直接インタビューして詳細に聞くなどのフォローアップ・インタビューがおこなわれている。

たとえば、重光（2015）は調査対象者に初対面の人と会話をしてもらい、その後に5分ほどの、調査者と調査対象者一対一のフォローアップ・インタビューをおこなっている。日本人の日本語母語話者25人、英・豪・米の英語母語話者51人が同じ文化背景をもつ話者同士の初対面の人とおこなった会話のあとにインタビューをし、初対面会話での「会話の中での心がけ」などを聞いている。補助的なフォローアップ・インタビューで、インタビューの方式などを厳密に決めずにやったため、人によって答え方がまちまちであったようだが、それでも、言語間の違いが見えてきている。たとえば、日本語母語話者は「他の参加者を理解しようとする」「他の参加者のリードにまかせる」など他の参加者への配慮をこころがけるという発言が多かったが、英語母語話者は「自分を知的であるように見せたい」「たくさん質問をする」など、話し手自身がいかに能動的に振る舞うかに心をくわいているかを言及する傾向があるなどの事が見えてきている。

フォローアップ・インタビューは、インタビューの仕方によって結果に大きな差が出てくる。ファン（2002、pp.92-93）は、（1）研究者の意識または解釈を加えないこと、（2）内容確認に終わらず、積極的に調査対象者の意識や表面化されなかった行動について質問すること、など、フォローアップ・インタビュー実施の際の留意点をまとめている。村岡（2004）は実際にインタビューを文字化したデータでインタビューのやり方を分析、ファンの5つの留意点を例証、と同時にインタビューが不用意に示す解釈フレームは調査対象者の応答に作用するので避けるなどの留意点を追加している。インタビュアーは、留意点を熟読した上で、何回かのパイロット調査で経験をつむ必要があることがわかった。

2. 2. 調査の実際

内省データはフォローアップ・インタビューで収集することにし、調査の手順を決めた。以下に、パイロット調査の全体の流れ、調査・分析方法の実際や気づいたことを、順を追って説明する。

〈調査対象者〉

60歳前後のアメリカ人女性2人。1人は大学教授（調査対象者A）、1人は銀行の役員（調査対象者B）である。2人とも高い見識を持ち、言語使用に関しては注意深い方である。

〈メールの題材設定〉

調査対象者が書きやすいように、調査で書いてもらうメールの題材を設定した。メールは意図がはっきりしているものにし、送信相手との関係も決め、5から10センテンス程度で書けるものを想定したが、調査対象者に長さの指定はしていない。今回は、以下の様な3種類の場面での7通のメールを書くという設定で調査をおこなった。登場人物はすべて実在の人が想定できるものとし、その人を思い浮かべながら書いてもらった。

表 1. メールの内容・相手

場面 1	職場での依頼メールに対する断り。受け取ったメールの内容： Hi, X (receiver's first name). We have a visitor coming in from XX (location) next week and I would like him to see what you do in XXX (job section). Would you mind spending a couple of days with him? XXXX (sender's first name)
	☐相手1 日常よく接している、自分より立場の下の同僚
	☐相手2 日常よく接している、立場のあまり変わらない親しい同僚
	☐相手3 日常接している、自分より立場の上の人
場面 2	日本滞在の際にお世話になった人へのお礼のメール
	☐相手4 非常に親しい友人
	☐相手5 やや親しい知人
	☐相手6 やや親しい目上の人
場面 3	息子を亡くした人へのお悔やみのメール
	☐相手7 とても気に入っているレストランのオーナー 相手はこちらの事をあまり覚えていない

〈メール作文と画面収録の手順〉

調査対象者が最も慣れているメールソフトの画面、あるいはWORD文書にメールを入力してもらった。このとき、いつもやっているように自然にメールを書く様に伝えた。メール作成の一部始終を、SRの画面収録で記録した。

SRはMac OS Xが持つアプリケーションで、Macのデスクトップ上の状態を動画として録画するものである。実際は英語版のSRを使ったが、ここでは日本語版の使い方を説明する。

SRを起動し、「ファイル」「新規画面収録」を選択する。これで、画面が収録される。収録の赤いボタンの右にうすく▼のマークがあり、それをクリックすると音声を内蔵マイクで録音することもできる。音声録音を選ぶと、本人がつぶやいたことなどが録音されるが、タイピングの音や周りの雑音も録音される。

画面収録の方は、作文中の画面は、なるべく画面上で大きく開いておいた方がよい。次のステップで字も読みやすく、どの画面を見ているのかわからなくなるような混乱が減る。SRの機能として、選んだ部分だけの収録というものもあり、それを利用して、メール作文の部分だけを収録し、再生したときに収録画面をはっきりさせる工夫も可能である。

準備ができたなら、赤い収録ボタンをクリックする。入力された文字、削除し書き換えている状況、考えて止まっている状態、など、メール作文の実際がそのまま記録に残る。

メールを書き終わったら、画面最上部のメニューバーにある黒の停止ボタンで収録を停止する。停止すると自動的に収録データが保存される。

〈収録画面の再生とフォローアップ・インタビューおよびその収録〉

すぐその場で、調査対象者と調査者で書き終わったメールの作成過程を見ながら、フォローアップ・インタビューをおこなう。調査対象者にメールの作成過程の際に考えたこと、感じたことなどを話してもらおう。このセッションは、画面全体を録画し、インタビューも録音しながらの、映像と音声同時の画面収録となる。メール作文の画面再生の操作は調査対象者にまかせ、必要な時には再生を一時停止して説明をしてもらおう。

調査対象者が内省を口頭で説明するのが苦手であったり、調査者が必要と思うところを説明しなかったりする場合は、調査者は、「ここで止まっていますね。何を考えていたのですか?」「あとから、挿入していますね、どうしてですか?」などの質問をし、内省しそれをことばで話してくれるように促す。ここで大事なのは、調査者が先回りしたり、誘導するような発言や質問をしたりしないようにすることである。

再生も終わり、説明も終わったら、セッションを終了し、収録も終了する。

メールを書くのに10分かかったとしたら、説明のセッションはそれよりやや長くなる。1.2倍程度のものが多かった。

〈SRデータの整理と文字化〉

データとしては、(1)作文時のSRデータ、(2)作文時のデータを見ながらのフォローアップ・インタビュー時のSRデータ、(3)書き上がったメール文、の3種類となる。

(1)は、今回は画像のみの録画である。画面でそのまま録画した物をみると、入力の変な速度が変わったり、止まったりしている様子がよくわかる。書いた物が消され別の物が書かれるなどの課程もよくわかる。しかし、その状態を文字で記述するのは難しい。SRでは、画面に詳細な時間が表示されるので、それを利用して考えている時間や入力の変な速度などが書き取れるとよいと考えて

いる。今回は、この段階の文字化はおこなわず、画面を再生した物を直接見ながらフォローアップ・インタビューをおこなった。急な停止、停止の持続には、書く内容を考えるなどの理由があるはずであり、そのような箇所はフォローアップ・インタビューで聞くべきところになる。

今回は（２）のインタビューの音声を文字化した。インタビューの内容がメールのどの部分にあたるのかわかりやすく示すために、（３）のメール文で内省がおこなわれた所に番号をつけていった。インタビューでの調査者と調査対象者のやりとりは、WORD で芝居の台本の様にしていくという、最も一般的な方法をとった。

やりとりの発話の文字化の理想的なフォーマットは、音楽の五線譜のようなものだと考えている。１小節を、たとえば２秒とし、五線譜の一本一本を１人の発話者とする。そこに発話内容を記入すると、どこで会話が途切れ、どこでオーバーラップしているか、どこでゆっくり話し、どこで早口になっているかが一目でわかる。調査対象者と調査者のやりとりの様子が手に取るようにわかるものだと思うのだが、まだその作成方法が見つかっていない。今回は、インタビューのやり方の検討材料としてのやりとりと、調査対象者の内省の言語化の部分に焦点をあてての文字化であるので、一般的な芝居の台詞のフォーマットでよいと考えた。

3. 言語化された内省

フォローアップ・インタビューの文字化の結果、調査対象者の発話には、少なくとも２つのタイプの内省があることがわかった。一つは、礼状は Dear で始めるものだ、というような「わきまえ」¹⁾としての説明、もう一つは、協力的な事を前後に書く事で断りの拒絶感をへらす、というような「働きかけ」としての説明である。また、その説明の中には sincerity などの、書き手の考え方の基盤を紐解く鍵になりそうなことばが使われていた。データが少なく断片的ではあるが、以下に例を示す。調査対象者やどの内容の手紙かは、表 1 のメールの内容・相手のリストに準じて、アルファベットと数字で示す。A は調査対象者 A（大学教授）、4 は、相手 4 の内容（非常に親しい人への礼状）という意味である。

いくつかのメールをとりあげ、そこで言語化されている内省をいくつか抽出していく。親しい友人への感謝状（相手 4）では、以下の様な内省がされている。

非常に親しい相手に対する礼状の最初を Dear で始めていることに関して：

内省 1：A：Yeah ... It's a genre.

時間がかかっていることに関して：

内省 2：B：Now, I'm thinking – what do I want to say. ...

親しい友人への手紙に関して：

内省 3：B：I consider X is a real friend, and so for me the letter is very personal.

Thank you. ではなく、I wanted to say thank you. と書くことに関して：

内省 4：B：Thank you is too abrupt to start.

内容が非常に具体的な事に関して：

内省 5：A：... Yeah you have to pick up some examples of what was fun. So this is what stands out in my mind.

内省 6：B：If you are going to write something like this, you want to personalize it, I think. ... This is another form of being honest. It's a kind of sincerity; it shows sincerity.

内省 7：B：I really think about the time when I'm writing this letter. I don't just say thank you nah, nah, nah, I think I think in my heart about what was special and I put that in the letter. ... But this is because we are friends and I mean, I mean it's sincerity.

見直して、単語を書き換えている事に関して：

内省 8：B：I had the word "warm" many times. ... And it's because that's how I feel. ... But you can't stylistically keep the same word many times. ... Generous. ... heart-warming ... And then and then X is warm. So I use the word "present" for him....

上記の内省を読んでいくと、礼状は Dear で始めるものだ、というわきまえからはじまり、親しいが故に、礼状の内容に関しては、具体例で最も印象的な物を選ぶなど心をくだし、最後には文章を見直して、語彙の選択にも注意している。短い礼状のメールでも、自分の気持ちが伝わるように、さまざまところに気を配っていることがわかる。

宛名をどう書くかに関しては、パイロット調査のメールではパターンがあった。すべてファーストネームで姓は使われない。Dear か Hi にファーストネーム、あるいはファーストネームだけの場合があった。感謝状とお悔やみは Dear、職場でのやりとりは Hi とファーストネームか、ファーストネームだけである。同僚同士は Hi で始め、ただし何度もやりとりをしている場合には、名前だけという場合もあるという。面白いのは、上司・長などの立場にある同僚に対しては、名前だけが使われていた。これは、Hi だとカジュアルすぎるためとのことであった。Casual と formal のわきまえは、そのような細かいところで働いていることがわかった。

同僚に対する断りメールに関しては、B には、まず、協力的な態度を示す言葉で始まり、具体的にできない部分や条件などを述べ依頼通りにはやれないという断りの姿勢を見せ、そのあとまた協力的な態度を示すという、言い方の大枠があることがわかった。B の出だしは協力することを明示、あるいは、自分にその仕事を回してくれたとのことのお礼と共に協力することを明示している。

例 1：We are always happy to introduce people to what it is we do here. (相手 1)

例 2：Thank you for thinking about including XXX. We will be happy to work with you to find a way to make his time with us as productive as possible. (相手 3)

中間部はやんわりとした断りで、話がおおざっぱすぎる点を指摘し、自分のできない理由を述べている。

例3：Generally, it's helpful to have an agenda for the time they spend there so we can try to make the experience as meaningful as possible. Unfortunately, early June is a terrible time to do this. We are in the middle of our XXXX and I'm getting ready for a two-week vacation ... (相手1)

そして、また協力体制を述べる：

例4：I would be happy to discuss this if he were to move his trip to July.

Otherwise, I think XXX would be willing to help out. (相手1)

Aのメールでも、出だしはやはり協力的な文になっている：

例5：I am happy to sit down with our visitor over coffee or lunch to explain the program. (相手1)

例6：I'm happy to help out in any way I can. Can you give me a bit more information on this person? Does she have ... (相手3)

Aのメールは短く完結で、例5では最初に自分のできることも書きこみ、例6では、続けて、来る人物について情報が必要だと質問を列挙し、その上で、自分が提案できることを書いている。メールのスタイルに違いはあるが、両者とも、断りを、協力姿勢で挟み込むという相手への気遣いをみせている。これらに対して、様々な説明がなされている：

内省 9：A：... do I want to sound more friendly, ... (相手1)

内省 10：A：... Yeah, so continue negotiating. ... don't close the door. (相手1)

内省 11：A：... I'm asking questions which keeps the door open. (相手2)

協力しない、これでおしまい、というのは絶対に避けるという態度が見える。また、質問を続けたり、提案をしたり、メールの上でかなり実際にも協力しており、相手との関係を崩さず断るための気遣いがかなりあることがわかった。

内省の中にもつかることば、上記の例では、personal, sincerity, friendly, keeps the door open等が、メールを書くときに大事に思っていることだということも、見えてくる。また、そのことばが使われている部分が、気遣いの表現・物の言い方であることもわかった。

データ量が少なく、分析も十分ではないが、メールの作文を巡るフォローアップ・インタビューは、アメリカ人が何をどう気遣うかを見る手段としては有効だとわかった。

4. まとめ

本研究では、メールを書くときに焦点を絞り、画面録画を利用してメール作文過程そのものを記録、それを再生しながらの調査者と調査対象者のフォローアップ・インタビューを実施し、それを収録・文字化することで、書き手の内省が言語化され、内省分析のデータとなり得ることを検討した。小さなパイロットスタディーの結果だが、この方法は、自然な作文が書けるように、また、内省を自然に語ってもらえるように留意することで、母語話者の内省が抽出され、そこで

語られた内容の分析から、書き手の顧慮が明確になっていく可能性があることがわかった。本稿は、方法論の記述と、パイロット調査の結果報告で、今後の研究の方針と可能性を示した。

謝辞：本稿作成に関しては、ポートランド州立大学国際言語学部教授 Pat Wetzel 氏から構想段階から多くの協力を得ている。Wetzel 氏との研究交流は、国際センターの派遣および招聘制度で可能となった。QuickTime Player Screen Recorderについてはメディアセンターの協力も得ている。SRデータの文字化は試行錯誤で、落合はる菜さんの協力無しでは不可能だった。構想段階でアメリカ英語の機微を教えてくださいました方々、内省データ収集の調査対象者になってくださった方などを含め、協力してくださった皆さんに深く感謝している。研究ノートの段階だがここで成果をまとめ、感謝を表したい。コメント、批判、提案をいただけるとありがたい。

注

- 1) 「わきまえ」および「働きかけ」という敬語行動のとらえ方は、井出、他（1986）が提唱したもので、日本語の敬語行動は「わきまえ」の部分が多く、英語は「働きかけ」が多いと考えられている。

References

- Brown, E. K. (Ed.) (2006). *Encyclopedia of language & linguistics* (2nd ed.) Amsterdam: Elsevier.
- ファン、S. K. (2002) 「対象者の内省を調査する (1) フォローアップ・インタビュー」 Neustupný, J. V., & 宮崎 里 (共編著) (2002) 『言語研究の方法：言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』 くろしお出版 pp.87-95
- Gambier, Y., & Doorslaer, L. v. (Eds.) (2010). *Handbook of translation studies*. Amsterdam: John Benjamins.
- 井出祥子、荻野綱男、川崎晶子、生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
- Jourdenais, R., Ota, M., Stauffer, S., Boyson, B., & Doughty, C. (1995). Does textual enhancement promote noticing?: A think-aloud protocol analysis. In R. Schmidt (Ed.), *Attention and awareness in foreign language learning* (pp. 183-216). Honolulu: University of Hawaii Press.
- 南不二男 (1987) 『敬語』 岩波書店
- 村岡英裕 (2004) 「フォローアップ・インタビューにおける質問と応答」 村岡英裕 (編) 『接触場面の言語管理研究』 Vol. 3 千葉大学大学院社会文化科学研究所 pp. 209-226
- Neustupný, J. V., & 宮崎 里 (共編著) (2002) 『言語研究の方法：言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』 くろしお出版
- 重光由加 (2015) 「初対面会話で求められていること：日本語母語話者・英語母語話者へのインタビューを比較して」 『ことば・文化・コミュニケーション』 (立教大学異文化コミュニケーション学部紀要) 7、143-151.